



6 嵐の中の恋（木星）

嵐なんて怖くなかった。例え、体が吹き飛ばされそうだとしても。逆に、吹き飛ばされることで、痛みを感じることで、あたしはあたしの体を、あたしが生きていることを実感することができた。敵が欲しい。敵がいるからこそあたしが存在しているのだ。あたしの存在理由はあたしの敵。

だからこそ、静寂が怖かった。静かになればなるほど、あたしの右手が、左手が、右足が、左足が消えていくような気がした。そのうちに、血の流れる音も、息を吸う音も、心臓の鼓動の音も消えていくような気になる。そこしかない音は、かえって、存在が不器用になり、消えていく運命しかないのだ。あたしの命を賭けられるもの。それはあの人だ。

あ的人是ヒーロー。とてもあたしが近づける人ではない。いつもテレビの画面に向かって応援しているだけだ。あ的人是宇宙人。M72星雲からやって来たらしい。らしいと言うのは、テレビではそう放映しているからだ。あたしが直接M72星雲に行って、確認したわけではない。もちろん、あの人に、直接、話を聞いたわけでもない。あたしの本棚に、あの人に関する本が、雑誌が百冊以上積み重なっている。でも、ほとんど読み返すことはない。

テレビの番組は、何十本も録画している。それも、消えてしまわないように、録画機器だけでなくDVDやパソコン、SDカードにも保存している。でも、その記憶媒体を見返すことはない。なぜなら、全てのことがあたしの頭の中に刻み付けられているからだ。そんなものを見返す必要がないのだ。見返すこと自体が、あの人への冒涇になるのだ。それなら、そんなもの何故、持っているのか、問うかもしれないけれど、持っていること自体が重要なのだ。あの人に近づくための、階段の最初の一步なのだ。

記憶媒体だけじゃない。ぬいぐるみだって、小さなものから等身大の大きさに至るまで、何十種類も部屋の中に飾っている。ふとんもシーツも、まくらもあの人顔や姿が描かれている。あの人顔や姿がプリントされたTシャツやパジャマを着て、あの人と一体化するために、そのベッドにダイビングしている。また、この年齢で幼いと思われるかもしれないけれど、あの人顔の等身大のぬいぐるみを抱いて眠っている。

それだけじゃない。スマホをいじり、どこかの街のデパートやお祭りで、あの人顔のショーがあることがわかると、どこまででも観に行く。そしてショーの終了後、サイン会があれば、どんなに長い行列ができて、何時間でも待つ。そのくせ、いざ、あの人顔の前に立つと、顔を直接見ることが出来ずに、うつむいたままで、ブーンと幽かに聞こえる蚊の鳴くような声で「お願いします」としか言えない。あたしは、何を願っているんだろう。そう、あの人顔の全てを願って

いるんだ。

そんなあたしに対して、あの人は「ありがとう。よく来てくれました」とあたしだけのために声を掛けてくれる。もちろん、他のファンの人にも同じような言葉を掛けているのだろうけれど、声の質が違うのだ。声の品が違うのだ。声の味が違うのだ。

あの人があたしに声を掛ける時は、深い愛情に満ち満ちている。もちろん、他の並んでいる人には気がつかないし、あの人の回りのスタッフにも気がつかない。あたしだけに特別な扱いをしてはいけないという、あの人なりの配慮だろうだけれど、そこから漏れてくるあたしに対する愛情をあたしが気がつかないはずがない。

あたしは素知らぬ顔でそれをしっかりと受け止める。あの人のささやかな微笑みとあたしのかすかに持ち上がった口角がそれを証明している。まさに、あうんの気持ちの交換なのだ。誰にも気づかれない秘密の印。

あの人は正義の味方なのだけれど、サイン会の時には、あの人の雰囲気には似合わないような、黒い帽子を被り、瞳が見えない真っ黒のサングラスをかけて、あえて黒い髭を剃り忘れた黒一色のスーツを着こなした悪漢のような男が、二人も三人もがあの人の周りを取り囲んでいる。あんなゲスのような人たちがいなくても、あの人が瞬きをしただけで、小指を動かしただけで、この星を征服しようとする悪い宇宙人や怪獣どもを懲らしめることが出来るはずだ。けれど、今は、サイン会。あの人にも休息、休憩が安寧の時間が必要なのだ。この時くらい、悪漢もどきのガードマンたちに身を守ってもらうことも、許してあげたい。

いざとなれば、ガードマンに代わって、あたしがあの人を守るのだ。だから、あの人にサインを書いてもらっている最中も、ポケットの中のボールペンを握り締めて、注意深くあたりを伺っている。犬が来ようが、猫が来ようが、鳩が来ようが、あの人には一歩も近づかさない。あたしはどんことがあってもあの人を守る準備が出来ている。

あたしはサインをもらおうと、あの人の顔を一目も見ずに立ち去る。けれど、あの人の熱い視線を背中に受けている。一歩、一歩、あの人から遠ざかりながらも、心だけは、かえって口から喉、肺、心臓へとあの人の内部に近づいている。

だから、あたしは怪獣になった。それは、少しでも、あの人のそばにいたいからだ。また、住む場所も太陽系でもっとも大きい木星に変えた。本当はM7 1星雲でもM7 3星雲でもいいのだけれど、あの人の前でストーカーまがいのことはしたくないのだ。怪獣になること。これがあの人と一緒になれる最後の手段なのだ。あの人と一緒にいられるならば、あたしは悪にでも、怪獣にでもなる。

あの人のパンチがあたしの頬に向かってくる。当たった。でも弱い。そう、あの人はあたしが怪獣になっているのを知っているのだ。だから手加減しているのだ。でも、それではダメだ。あの人の信頼が失なわれてしまう。あの人がこれまで培ってきた正義のヒーローの地位を失ってしまう。それでは、あたしが怪獣になった意味がない。

あたしは涙を流しながら、あの人に噛みついた。これはルール違反だ。本当は正々堂々と闘うべきなのだ。でも、それでは、あのじとは手加減をしてしまう。あの人が思う存分、あたしを痛みつけられるようにあえて反則行為を行う。あたしたちの闘いを見ていた人たちは、それを見て、あたしに怒りの矛先を向けるとともに、あの人の声援を送ることになるのだ。

本当はこんなことはしたくない。でも、こうしないとあの人と一緒にいられない。こんな矛盾があるのだろうか。だが、あたしはその矛盾を受け入れる。矛盾こそが、あたしのあの人への愛の昇華なのだ。

あたしの右腕が引きちぎられた。焼けるような痛みだ。あの人を見つめる。あの人はあたしの引きちぎった右腕を見て、驚いている。持てあましている。まさに、こんなことはしたくなかったんだと後悔の念で心が引きちぎれそうなのだ。

それが証拠に、あの人の目から涙が出ている。つぶらな瞳が赤く充血している。その涙は母なる海の中から一滴したたり落ちると、鼻の横、唇の横を滴り落ちて、首筋に落ち、あたしとの闘いで流れた汗と一緒に地面に落ちた。あの人は悲しんでいる。あの人は涙を拭こうともしない。胸のタイマーが点滅している。動揺している。それが証拠だ。そんなあの人の悲しみに比べれば、あたしが右腕を失った痛みなんて軽いものだ。比べようもない。

あたしは地面に倒れた。体中に痙攣が走る。意識を失いそうだ。死。それはあたしが望んだことなのだ。あの人はそんなあたしを憐れむような顔で、立ってもいられそうにないようだ。早く、早く、勝負を付けて欲しい。だけど、あの人は、これ以上は、残酷でとてもできそうにないような顔をしている。

ダメだ。このままではダメだ。悪い怪獣に情けを掛けるなんて、あの人のこれまでの生き方が否定される。あの人とあたしの闘いを見ている観客に、悪い印象を与えてしまう。悪い奴は徹底的につぶさないと、叩きのめさないといけないのだ。それこそが、正義のヒーローなのだ。

この状況を何とか変えないといけない。あたしは最後の力を振り絞った。背中の子びれが青く光る。いまだ。口からあの人に向かって炎を吐き出す。もちろん、あの人の右頬から一メートルほどはずして。決して、あの人には当たらないように。こうすれば、あの人もあたしの息の根を

止める理由が見つくし、観客もあの人がした行為を正当防衛として認めてくれるだろう。

あの人はあたしの最後の火炎放射が外れることを知っていたのか、微動だにせずに、手を十字に組んだ。十字の手から光線が発射された。十字架光線だ。あたしの悪い心を、悪い行いを、正しい心に、正しい行為に導く神の教えなのだ。光線はあたしの体を貫いた。細胞が燃えて行く。赤く、赤く燃えて行く。体は燃えるものなのだ。炭素の固まりなのだ。初めて知った。もちろん、最初で最後に知ったことになるのだが。もう、これからは知識を得る必要も、得る機会も永遠に失うのだ。口からもごもごと赤い血と共に最後の炎が噴き出た。

ここまでがあたしの記憶だ。これ以上の記憶はもはやない。ようやくあたしはあの人と一緒になった。これからあたしはあの人が倒した怪獣として、あの人や観客たち、ファンたちの間で語り続けられるのだ。記録じゃなくて、記憶として。

「カット」

映画監督の、近所の猫が庭におしっこをしたようなあきれはてた声。

「君。困るなあ。着ぐるみの怪獣がそんなに感情を込めて演技をしなくていいんだよ。主役は正義の味方だよ。誰も君なんか見てやしないよ。まあ、カメラには映っていないからいいか。さあ、次のシーンを撮ろう」

倒れている私を後にして、監督をはじめ、カメラマン、照明、正義のヒーローを着た着ぐるみ、その他スタッフたちは別の現場に移動していった。残された私は、誰の記憶にも残らないまま、撮影現場を後にした。